

第2次生涯学習推進計画の具体化に向けて（1）

「学び返し」を実現するために

中間答申

平成22年3月

府中市生涯学習審議会

はじめに

府中市が平成21年度に策定した「第2次府中市生涯学習推進計画」（以下、推進計画という）では、今までの「学ぶ」だけの生涯学習から、ひとりひとりの体験や学んだことを生涯学習活動やさまざまな地域活動の中で生かす、「学び返し」¹を提唱し、推進するとしている。

本答申では、平成21年5月に教育長からの諮問「第2次生涯学習推進計画の具体化に向けて」を受けて、審議会でこれまで審議してきた内容をもとに、推進計画の基本目標について【現状】、【課題】、【展開】として考察する。

“生涯学習は楽しい「学び」であり、だれにも強制されるべきではなく「したい人」が「したい時」に「したい内容」を「したい場所」でできるのが、生涯学習の本来の姿（文部科学省より）”である。

このことを念頭に置きながら、特に急を要する対象者として団塊の世代²に焦点をあて、「学び返し」の趣旨を踏まえつつ、その地域活動への受け入れ態勢や、彼らが一歩踏み出すための動機付けをいかに構築するかについて集中的に討議した。

そこから推進計画を具現化し、団塊の世代の地域における活動の勧め、一歩踏み出すための動機付けをいかに構築するか、学校行事に絡ませ、子どもとの接点を地域の中で実践すること、スポーツを介して世代を超えて、生涯学習を実践する等について考えた

い。

¹ 「学び返し」：府中市生涯学習審議会で提言された造語。市民が、今までの「学ぶ」側から、自ら学んだことや身につけた知識・技能など「学び」の成果を、地域住民等に「返す」とする考え方。本計画のキーワードとなっている。

² 団塊の世代：1947年（昭和22年）～49年（同24年）に生まれた約810万人を指す。日本の出生数はこの3年間に毎年270万人前後を記録した。その前後の年よりも2、3割多く、非常に突出した人口ボリュームをもっている。

1 「学び返し」

【現状】

推進計画でキーワードとなっている「学び返し」を進めるにあたっての現状について考察してみる。

府中市は伝統と新しさが融合している街である。学習環境の面では、生涯学習センター、文化センター、ルミエール府中等の施設が存在し、それに伴い現在は約1,200もの社会教育関係団体のほか、NPO³・ボランティア関係等の団体が存在し、年々増加傾向にある。また、これらのほか、文化団体連絡協議会（以下、文化連）では、月1回の役員会、グループごとの行事、そして様々な学習機会が提供され、活発に活動している。

地域活動については、多くの地域で自治会やPTA、消防団、文化センターを中心としたコミュニティ協議会（以下、コミ協）等で活躍する人々が、地域の様々な行事でリーダーシップを発揮し、くらやみ祭りを頂点としたお囃子等の伝統行事も受け継いでいる。しかし、地域によっては、多くの世帯が自治会に加入したものの、積極的に交流しようという気運が生まれづらいところもあるという。そういった地域の中でも一部には、朝の挨拶やスポーツ等で交流を深める取り組みを行っているところもある。

学校と地域の連携としては、読み聞かせ、パソコン、英語、しいたけやわさびの栽培、水田等、各校で取り組みたいものについて教育ボランティアを募集して実施しているところもある。

【課題】

① 団塊の世代の生涯学習への参加

現在の社会環境では、生涯学習への参加や実践活動の中心となって行くのは、いわゆる団塊の世代やその上の年代層にあり、需要も高く、しかも効果も期待できると思われる。実際に今までの審議会の中でも、団塊の世代の可能性が指摘されており、「学び返し」を実践するため、是非地域の活動に参加して欲しいという願いが多く聞かれる。しかし、特に多くの男性は会社組織の中で仕事をしてきており、退職後に地域社会と関わりを持ちたい、深めたいと考える人たちも、どのような形で地域に入ったら良いのか悩んでいる。

自ら一歩踏み出すことに悩んでいるのであれば、やはり既存の団体やクラブ等の組織が、積極的に働きかけをすることで入りやすくなるのではないだろうか。また、ワーカホリック⁴をどう抜け出すかについても課題である。同様に、既に退職した

³ NPO (NonProfit Organization) : 特定非営利活動法人のこと。営利を目的とせず公益的な市民活動を行う団体の総称。

⁴ ワーカホリック (workaholic) : 「仕事中毒」または「仕事（職業）依存症」とも呼ばれるもので、英語の「仕事 (work)」と「アルコホリック (alcoholic) = アルコール依存症」からきた造語。私生活の多くにまで犠牲を払い、職業であるはずの仕事に打ち込んでいる様子を表す言葉のこと。

年代の中でも、なかなか外に出にくい人と、チャンスがあれば参加したいと思っている人がいるのではないか。

② 地域での「学び返し」への参加

自治会の活動に、まったく関心を持っていないわけではないが、第一歩を踏み出せない人に対し、「地域デビュー」というテーマでセミナーを実施したところ、団塊の世代を中心に、熱心な方々が参加してくれたという事例もある。そのような人達の意見を聴く等、どう参加のきっかけづくりをするか検討することも必要だと思う。

③ 学校と地域の連携

誰もができる、例えば、地域の人たちが放課後子ども教室で指導したり、子どもたちと遊んであげたりということも「学び返し」として捉えることができるが、府中市でも、学校と地域が協力し、中学生の職場体験学習等が盛んに行われている。しかし、昨今の社会・経済的環境の影響などにより、受入先の期間短縮等の問題も発生している。また、スポーツや伝統文化等を通して、地域の人々によって、子供たちの身体的、知的、文化的発達が促され、それがマナーの醸成に結びつけば、なお良いことである。

【展開】

① 現状と課題から見えてくるものは、団塊の世代で言えば社会参加の半歩が踏み出せないため、地域をはじめとしたコミュニティ環境に融合できないといった事例が見られ、大事なことはそのきっかけづくりである。自治会から推薦される等して行事に参加し、共に活動する事で興味が湧き、積極的に参加するようになってきたという事例もある。

これらを踏まえ、今後の展開目標としては、次の項目が考えられる。

- ・地域活動するための案内と地域リーダーの育成
- ・楽しみながら、学習を通して将来の展望を開く生涯学習のすすめ
- ・発表会等、人から人へ、グループからグループへのつながり
- ・祭等の楽しいイベントを通して地域コミュニティの充実を図る
- ・共同作業する中で大人と大人の間でのコミュニケーション作り

② 「学び返し」というのは子どもだけが対象ではなく、大人と大人との間でも必要である。地域の担い手となるファシリテーター⁵になる人たちの育成を行うシス

⁵ ファシリテーター：一般的には「促進する人」「手助けをする人」などの意があり、ワークショップなどにおける進行役や司会者を指すことがあるが、平成 19 年 12 月の東京都生涯学習審議会第一次答申において「地域の中で社会的なつながりを創出する推進者としての役割を果たす人、地域の担い手」を指しており、本計画でも、同様の意味で使用する。

テムを作っていければ良いのではないかと考える。

しかし、生涯学習は、プロになる道ではなく、自分が進んでいく道を決めるきっかけづくりでもあるので、地域における生涯学習の担い手として、人生を楽しみながら過ごし、いつまでも健康で長生きすることを念頭に進めることで、生涯学習の目的に行きつくのではないか。

③ 学校行事及び体験学習、放課後子ども教室等を実施する中で多くの学びの機会が生まれている。この場を生かし「学び返し」の拡大を図り、生涯学習を推進する仕組みを作ることが大切ではないか。

2 居場所づくり

【現状】

生涯学習のための居場所のひとつとして、市民への学校開放があげられるが、現在、学校開放は市立小中学校全校で行っており、放課後子ども教室の実行委員会が主催する子ども事業は全小学校で実施している。主な開放場所としては体育館と校庭であって、教室は比較的少ないが、必要に応じて、オープンスペースのような部屋を使えるようになっている。主として、地域住民や地域のスポーツ団体等が利用している。その中でも、昼夜を問わず、サッカー等のスポーツを中心にした活動の利用度が高い。また、多くの学校では、地域の子どもたちの利用も多くあり、府中市の学校はこの点で積極的に居場所づくりに協力している。

学校以外での地域における「居場所」について考えると、府中市には文化センターをはじめとする多くの公共施設があり、学びの場として多くの市民が利用している。また、外国人が学ぶ場としての一面を持つ国際交流サロンでは、ボランティアが外国人に日本語を教え、福祉の面での居場所としては地域生活支援センター等もある。

【課題】

- ① 学校と地域住民とを結ぶ体験学習のさらなる充実
- ② 中高生を主な対象としたYA⁶（ヤングアダルト）世代の居場所の確保
- ③ 子ども達が活動発表をすることができる機会作り
- ④ 講座参加者の活性化
- ⑤ シニア、ミドル、ジュニア各世代の交流の場を設ける必要性
- ⑥ 市内各地域には囃子や囃子保存会があるが、古くからの住民がかかわっている場合が多く、新住民が参加しにくいという側面もある

【展開】

① 「学び返し」をするには、学びの出会いをどのような場に設定するかが特に重要である。地域の大人は、子どもたちと一緒に学習することもよいのではないかな。子どもには大きな可能性があり、小さい頃からいろいろな体験をさせたり、豊かな体験を持った大人の苦労話を交えて楽しさを知ること、子どもたちは興味を持つと考える。教える側の大人にとっても、これまでの経験が役立てば嬉しいであろう。

② 次代の社会を担うべき青少年、いわゆる思春期における子どもたちは、家族、社会、地域において居場所となるべき場を見失いがちである。青少年たちが集える中央図書館にあるYAルーム、府中市美術館のティーンズスタジオの活用を促進していくことも必要なのではないか。

⁶ YA：ヤングアダルトの略。一般的に13歳～19歳の“若い大人”という意味で使われている言葉。

③ 文化センターまつり等、地域で行う催しの中に、子どもたちの出番を増やすことも考えてみたい。発表の場があることで、小中学生が自分たちの活動に対するやりがいや地域の中での居場所を見つけるきっかけにもなるのではないかな。

④ 一般的に、講座を受講しても、話しを一方的に聞くだけになりがちである。その後の質問やディスカッション等ができる終了後の受講者交流等も有効である。例えば、セミナーや講座の受付についていえば、その行為自体が一つの「学び返し」であり、居場所でもある。そして、同じ場所に集まった仲間が受付にいるということが、受講者を勇気づけるのではないかな。できるだけ、さまざまな活動へと関係が持てるよう次から次へと人をつなげていくことが大切である。

⑤ 遠出することが難しい高齢者には、居住地域内に集まれる居場所として、町内寺子屋の設置を提唱したい。地区内の空き家等を活用し、高齢者がいつでも好きなときに集まれる場所を確保する。また学童保育や、各種塾等に行っていない子どもやその父兄も、そこに行けば、世代間での自然発生的な交流が生まれ、まさに「学び返し」活動となるのではないかな。

⑥ 伝統文化を次世代に伝承するため、地域における学習情報の収集と提供を行う。

3 新しい学習活動支援

【現状】

府中市は、スポーツのクラブや文化グループ等が合宿することができる生涯学習センターをはじめ、文化センター等、学習活動を行うことのできる施設が充実しており、生涯学習を推進する役割を果たしている。

これら施設では、市民への学習活動のための場所提供のほか、各文化センター等で実施している地区公民館講座や図書館講演会、生涯学習センター講座、家庭教育学級、知的障害者成人教室（あすなろ学級）等も開催している。また、スポーツ活動への支援として、指導者を派遣、各種スポーツ大会等も開催している。これら施設以外でも、さまざまな講座やイベント等数多くの取り組みが行われている。

【課題】

① 地区公民館講座の提供

府中市は施設等のハード面は充実しているが、ソフト面を考えると、文化センターの公民館講座は、趣味の講座が多く、学習に関する講座は幾分不足している。

② 生涯学習のきっかけづくり

生涯学習のきっかけづくりは難しい問題であるが、大切な課題である。自分で一歩踏み出せる人は、友人等との情報交換を通じて、参加が期待できるが、一歩踏み出せない人をどのように支援するかの問題がのこる。

【展開】

① さまざまな形で学習する機会を設置するのは非常に重要であり、行政で場所を提供して、ファシリテーターとしての役割を担う市民、あるいは企業が講座などを開催する等、学習情報の発信を積極的に行うことが重要である。その一例として、生涯学習センター、女性センター等の講座内容をまとめて、各文化センターに配信する等 ICT⁷を活用した講座を充実・発展するシステムが作れないだろうか。いずれにしても、生涯学習センターを中心とした連携を図ることが重要である。

② 参加したいという気持ちは持っているけれども、なかなか参加には至らない人を、どう後押しするかは重要な課題である。参加しつつ「学び返し」をしていくためには、どのようなグループに参加するかというだけにとどまらず、講座後の交流の機会を提供するなどを通じて、受講者同士が接する機会を増やすことが大事である。

⁷ ICT（Information and Communication Technology）：情報(information)や通信(communication)に関する技術の総称。日本では同様の言葉として IT (Information Technology：情報技術)の方が普及しているが、国際的には ICTの方が一般的に使用されている。

4 情報提供・相談体制

【現状】

情報提供・相談体制のひとつとして、府中NPO・ボランティア活動センターでは、市民がボランティア等自発的に何か活動したいと思った時の、第一歩を後押しする市民活動を推進している。

しかし、広報活動が不足しているためか、残念ながら利用者が少ない状況となっている。他方、社会福祉協議会では定期的に機関誌等を発行していて、福祉ボランティア等についての情報等も提供している。

生涯学習においては、平成11年に作成した「(第1次)府中市生涯学習推進計画」で、カレッジ・インフォメーション⁸と称して、生涯学習に関する相談・情報提供を行うことを生涯学習センターで実施している。

【課題】

① 情報提供の工夫

高齢者のお宅を訪問すると、広報紙等は手元にあるものの、介護保険等の情報が掲載されていても読んでいない場合が多々見受けられる。

② 新たな人材、資源の発掘

私たちが知らないだけで、府中に活力を与えるものがまだまだ沢山あると思われ、それらを「発見・発掘」していくことも必要なのではないだろうか。

③ カレッジ・インフォメーションの拡充と活用

カレッジ・インフォメーションをどのように市民にPRし、機能させていくか。

【展開】

① 高齢者だけでなく、すべての世代において、「口で伝えること」は非常に大事である。家族や身近な友達から広がっていく口コミ、傾聴は大事な機能である。その事例の体験談を聞けるような体制をつくり、それをサポートできるようなやり方も考えたら良い。

② 自らの能力の活用や学習活動をしようと思っても、未体験の人にとっては、その場所・機会を探すのが容易でなく、大変である。例えば文化団体が、いろいろなことができる可能性を追求して団体を組織しているように、地域に出ていくのをサポートする場所として、生涯学習支援を行う施設（生涯学習センターを中心に）と

⁸カレッジ・インフォメーション：平成11年に作成した「(第1次)府中市生涯学習推進計画」で重点施策として掲げた「市民カレッジの展開」の一つ。コンピューターなどを活用して、市民が利用できる学習情報の収集と提供を迅速かつ円滑に行う施策。

リンクさせて、そこでできるような相談窓口が必要である。ただし、学習相談の窓口は、毎日開いていないと機能しないので、例えば交通至便な府中駅の市政情報センターにサテライトを置く等、PRする方法を将来的に考えてはどうか。

③ カレッジ・インフォメーションの発展的拡充は、推進計画の中で、市民の学習をサポートする体制として検討されている（生涯学習サポート体制の整備）ので、ぜひ実現していただきたい。

周知の方法も、広報紙、ホームページだけではなくて、様々な方法を工夫する必要がある。

5 推進体制

【現状】

市内における生涯学習に関する施設の年間利用状況は、生涯学習センターが約33万人（図書館を除く）、文化センターが全館で約75万人、郷土の森博物館が約35万人、図書館が約72万人、女性センターが約6万人等となっている。また、スポーツ施設については、野球場、陸上競技場、総合・地区体育館等14施設合計で約150万人の方々に利用されている（数字はいずれも平成20年3月31日現在）。

他の施策との連携としては、生涯学習推進計画と同様に、「学校教育プラン21」の6つの重点課題の中に、学校・家庭・地域の連携・協力がうたわれている。

【課題】

① 文化団体同士の連携

スポーツは組織的に活動することが多く、教育委員会が大会を開催するときも、体育指導委員等の応援を求めることができる。一方、文化的な活動は、社会教育団体（自主グループ）が非常に幅広い活動を行うため、縦のつながりはあっても横のつながりがあまりない。文化団体同士の情報交換をもっと深めることが必要なのではないだろうか。

② 生涯学習センターの今後

生涯学習センターについては、平成15年の約48万人をピークに、年々利用者が減少しているので原因を分析し、必要に応じて指定管理者制度などの、民間活力の導入を検討すべきではないか。

③ 他施策との連携。

「学校教育プラン21」との整合性をもって、「学び返し」を行っているかどうかの検証が必要なのではないか。

【展開】

① 社会教育関係団体や文化関連団体全体の、情報の共有が必要である。互いの団体の交流を深める場が必要である。

② 生涯学習センターは、生涯学習ボランティアの活動が、比較的充実しているが、生涯学習の拠点としては今一つである。さらなる飛躍を遂げるために、より多くの市民の力を活用することで、活性化を図りたい。そのためには周りを巻き込んでイベントを実施できる人材育成をしていくことが望ましい。今後は、市民の意見を聞くなど、よりニーズにあった企画が望まれる。まず、全体としてなぜ施設の利用者が減ってきているのか、詳しく分析すべきである。利用傾向の分析後、民間の手法・活力を取り入れる指定管理者制度を導入すること等についても、メリット、デメリット

ットを積極的に検討する必要があるのではないか。その上で地域の人との出会いの場として、生涯学習センターに「学び返し」の推進を集中させることが効果的である。

③ 「学校教育プラン21」そして「第2次生涯学習推進計画」の課題にある「学校・家庭・地域の連携」を中心に、両計画の整合性を図っていく。またその実現を目指してファシリテーターを養成し、地域のボランティア活動を促進し、あらゆる生涯学習の機会を導く。

おわりに

以上考察した中で、推進計画で提唱している「学び返し」を展開するために重要なことは、地域をつなぐ担い手であるファシリテーターの存在である。また人々の自発的活動による社会参画から生まれる「伝承」と「学び」は、市民ひとりひとりが生涯学習をより身近な自己のものとするための助けとなるであろう。

これを具体化し、連携が実現してゆけば、団塊の世代を含むシニア世代を中心とした各世代の学習活動、場の提供、きっかけづくり、情報の交換等が図られる。「府中市学校教育プラン21」との連携も同時に推進できるような施策を検討、討議することも必要である。

今年一年間本審議会ではさまざまな意見が出され、検討を重ねてきたところであり、いくぶん抽象的な展開案も記しているが、次年度の当審議会での討議では、より具体的な展開を検討し、また推進計画に基づく生涯学習のあり方・方向についても、指定管理者制度の導入も含めて分析・検討を行う必要がある。この先10年間を見据えての推進計画ではあるが、社会状況等の変化により柔軟に対応することも必要である。

本審議会も、府中市の発展のために努めていきたい。